

日本統治期における女性像の異同

—龍瑛宗と西川満の作品を中心に—

侯 紀 安*

1. はじめに

1895年に日清戦争が終わり、台湾は日本の植民地として統制される時代に入った。植民地統治は一般的に領土、経済、資源の占有と略奪が行われるが、日本帝国は西洋列強と異なり、「内地延長主義」の施策を強調し、教育政策に精力を注ぎ、台湾全島における全面的な「国語教育」を施した。特に1937年に入ると、台湾人に対して「物心両方面の総動員」をかけるため皇民化運動が展開された。これに伴い、新聞の「漢文欄」のページが廃止され、中国語文による創作も禁止された。新しい言語の使用や政治上の思想統制は、台湾人が文学作品を作る際、苦悩する根源だと言えるが、日本語を読むことができる人口の増加も、日本語で文学を創作することに役立つことになった。

この時点では、西川満は先天的な言語の優勢によって、台湾にかかわる多彩な異国的・民族的・伝統的な美を、小説や詩などさまざまな形式によって一気に表現した。^{ツンサア}長衫・^{ホエキイ}花妓・^{ツェビヨウ}倣嬢などの台湾の社会風物を道具立てに、台湾語そのままを用いてエキゾチック且つエロチックな西川満なりの台湾小説を形成してきた。少年時代から芸術に対する生来の趣味を持ち、早稲田大学仏文科で浪漫主義の熏陶を受けた彼は、常に女性に関する素材を選んだ。一方、彼と同じ陣営の「台湾文芸家協会」に属する龍瑛宗は、前述のような強制的な日本語教育の下に成長した文学者であった。小

説・新詩・随筆・評論などを発表し、1940年代の台湾における代表的な作家として知られる。彼は、西川満らが日台文学者に募らせて発足させた「台湾詩人協会」「台湾文芸家協会」の会員となり、台湾作家の中において、彼は西川満との合作関係がかなり密接だと思われる。台湾文学への展望を深く期待していた龍瑛宗は、「台湾文芸家協会」の機関誌『文芸台湾』で文壇指導者の西川満の作風と作品についての評論を書いた。評論のなかには、肯定的な意見がある一方、否定的な批評もあるが、龍瑛宗はある程度西川満の文学に対して共感を持っていたと考えられる。

文学の志業に身を捧げた二人は、相同する環境で創作を続けていたが、植民者と被植民者という異なる立場から相異なる文学観を形成していた。女性を造形する場合、二人はどのようなイメージを女性に付与しているのかという問題は考慮に値すると思われる。本稿では、主として西川満の代表的な女性形象の一つである「藝姐」に関する作品に注目したい。また龍瑛宗が描いた女を叙述の中心とする作品と彼の女性観も取り上げて相互に対照し、日本統治期における女性像の異同を探索してみたいと考える。

2. 先行研究

龍瑛宗に関する研究の中で、女性を中心として考察しているのは林瑞明氏の「知られない龍瑛宗—女性キャラクターの堅持と反抗について」¹である。尾崎秀樹氏は楊達の「新聞配達夫」、呂赫

*台湾大学大学院生

若の「牛車」と龍瑛宗の「パパイヤのある街」の作品に対して「この三つの作品を年代順に通読してみると抵抗から諦めへ、さらに屈従へと傾斜する台湾人作家の意識がある程度たどれるよう」と説く。時代に従って皇民化の重圧が強くなったため、林氏は以上の論点に賛同するが、「黒い少女」、「知られざる幸福」、「ある女の記録」の短編の中では、龍瑛宗にはもう一つの面が存在していたと指摘する。1942年の戦争中に龍瑛宗は女を主役とする作品を発表し、女性が厳しい現実と直面していながらも諦めない意志を描いた。もしくはそれは物語の背後に隠された龍瑛宗の「堅持と抵抗」の精神ではないかと林氏は考える。

そして、羅成純氏は修士論文の「龍瑛宗研究」の第三章第三節では、同じく「知られざる幸福」、「ある女の記録」という二作について、高圧的な社会情勢に圧迫された彼の「忍従精神」を分析する²。戦争に対する理想化の色彩が淡くなった龍瑛宗は自身の誠実を要求することを示そうとする。彼はあらためて時代を超越する庶民の積極的に暮らしている精神を唱える。また、朱家慧氏は『二つの太陽の下にある台湾作家—龍瑛宗と呂赫若研究』の「戦時における龍瑛宗の柔弱な抵抗」を題し³、彼は意識の流れを描写するという斬新的手法を使い、女性解放と個性解放の自由主義思想を文章に隠したと論じている。

現在の研究では、西川満と龍瑛宗を同じ題目の下に位置して考察したものは林中力氏の「帝国下における二つの「南方」—西川満と龍瑛宗の詩作を視する」がある⁴。林氏は、帝国において両者の自我認識と風土に対する情感を詩歌という特殊な文体によって考察すると指摘している。この論文では、異なる南方印象をめぐって考察をはじめているが、「女性像」の研究にはまだ触れていない。

3. 女性形象の創造

(1) 西川満における豊かな女性幻想

多産な作家だと言われても過言ではない西川満は、重要な作品はほとんど台湾で完成させた。帰台後の1934年に、彼の本格的に描出された台湾での初の小説「城隍爺祭」を発表した。彼が最も好んだ大稻埕と江山楼界限を舞台として、藝姐阿梨の物語を描いた。類似する主題を扱ったものには、「花妓物語」「做嫖綺譚」「歌ご糸」「稲江冶春詞」などがある。1935年に連載されていた『台湾頭風録』⁵は斬新な「散文詩」という様式で、現実をはるかに超越する華麗な言葉が用いられる「台湾風俗絵巻」のようなものである。その中の第七回「花娘」(後に「江山楼附近」と改題)では、藝姐の生活状況を濃艶な筆致で描出している。以上を整理して見ると、「藝姐」は彼の創作生涯にわたる重要な女性キャラクターだと言えよう。

いわゆる「藝姐」とは、日本の芸妓と近似していて、一般的に公開の場で売春を行うことはないが、もし双方の意見が合致すると性交渉も可能であった。「江山楼」は1917年に建設された台北大稻埕の著名な娼家であった。このような場所は当時の政界や商界の要人あるいは文人たちが往来し集会していた場所でもあった。

西川満の在台期間にできた「稲江冶春詞」を例と扱いたいと思う。この作品は1940年に『文芸台湾』創刊号に掲載された短編小説で、「稲江」は大稻埕の別称である。あらすじは以下のように示す。

日本人の男性「私」と台湾人の藝姐抹麗は一年ほど前から付き合っている。元宵祭の夜に、抹麗が財宝を欲しいと祈るので、私の彼女に対するロマンティックな憧憬は若干そがれる。後に二人は稲江の近くにある抹麗の住居へ行ってから、彼は彼女が藝姐になった原動力が、母親が息子に向けて利他的な愛情にあったことを察し、抹麗に対する再評価を強いられた。二ヶ月後、青白い顔の少年が男の家に飛んできて、母を見舞ってもらいたいと懇願する。私がすぐに抹麗の住居を訪れ、死にかけている彼女と一緒に抹麗の叶わない夢を象

徴する山を眺めながら、感傷的な最期を迎える。

西川満は夫を戦争の関係で失った婦人を設定し、珍しく女の背景に触れていて、芸術的にさらに成熟した短編であると思われる。抹麗は残された子供を売って再婚せよという両親からの意見を拒否し、子供を養うために藝姐になると決める。こういう事実を知らせた「私」は感想が起る。

女の眼には、もうはぢらひなど微塵もなかった。強い意志が火のやうに燃えさかつてゐた。元宵祭の夜、いささかでもこの女を、世の常の女なみに見下したことを、私は恥ぢずにはゐられなかつた。すでにかの時、女は強い母だつたのだ。

要するに、作者は抹麗の個性に着目し更に心血を注いで物語を作った。彼女は単なる平面的な人物ではなく、より情感豊かになり、男の主人公と複雑に交流している。

(2) 龍瑛宗における堅忍の女性の根性

「パパイヤのある街」によって文壇に頭角を現した龍瑛宗は、この作品の中において封建社会の制度を批判したり、日本の植民地統治に対して抵抗するという台湾新文学の伝統的なテーマを継承しなかった。「台湾の彷徨たる男性知識人」のような形象は、龍瑛宗の小説における典型的なキャラクターとなるが、1942年に龍瑛宗は「知られざる幸福」などの作品を発表し、過去の題材を一変して女性を中心に描きはじめた。特異な存在となったその小説におけるヒロインを考察してみたい。

「知られざる幸福」(1942年9月『文芸台湾』第四巻第六号)という短編は、五十代の夫を亡くした女が、回想しつつ自分の一生を述べる。小説の前半は、彼女が貧乏な家で生まれ、二歳の時に養女⁶にもられ、十六歳に梁家の息子と結婚して娘を生んだが、愛情の乏しい生活と家族からの虐めに耐えられずようやく離婚して、愛する娘と

別れて独りで台北で働く。後半では、女が病弱な男と出会い、彼の孝心と温順な個性に感動し、反対の声を押しして再婚した。夫と息子とともに貧しくても楽しい生活を送り、「妾は人生の勝利者!」と結末で宣言する。

父母の期待を裏切った存在なので養女になってしまった彼女は、暴力の影におびえながら悲惨に暮らしている。「女は男にくらべて、とかく苦勞勝ちなものです、ことに台湾で生まれた女はかなしみ一入ふかいものでございます」と悲しい運命を繰り返して悲嘆している彼女は、逆に「若し不幸な生活をしなかつたら、おそらくは、いまの夫と一緒にならなかつたかも知れません。人間の禍福といふものは計りしれないものでございます」という達観した考え方を持っている。また、「夫は全身全霊を傾けて妾を愛してくれました。夫は、完全に妾のものです。妾は人生の勝利者です」と物語の最後に愛情を賞賛する。

戦後に発表した評論の中には女性問題に関するものが相当な部分を占めているという点を見ると、龍瑛宗は確かに「新女性」を鼓吹している文学者だと考えられる。彼の主張を見れば、知識・歴史・社会・政治などの課題を吸収することは、現代の新しい女性にとって学ぶ必要がある。しかしながら、男女平等を提唱しているうちにも、新女性は、「永遠に、女性としての本質を喪失してはならないと思ふ。女性の本質は一言にして言えば、それは母性愛の保持、女性としての優しさ、そして家庭を忘れてはならないと思ふ。」(「新しき女性」) こうして、彼の理想的な「女性形象」のありようが浮かび上がる。

「知られざる幸福」の女主人公は農家出身の身分で、都市の新しい潮流であれ、思想であれ、知識であれ、それらと接触する機会がほとんどないため、彼女は「現代の女性になりたい」という類型とは言えない。父権制度下の束縛と男尊女卑の伝統的な価値観に抑圧をうける彼女は、種々の苦勞に歯を食いしばったりするが、彼女のなかに内

在する強い力を湧きださせる。それは人間が生来有している一種の向光性の本質であると考えている。龍瑛宗の小説において、時勢の関係で時々深い悲哀に包まれる男性知識人は、社会で苦しくもがく様子として現れるが、本作の女性のように生き生きとしたキャラクターは、まだ人生の明るさを信じる積極的な面があり、読者に希望を与える。社会の現状を改変する力を持たないので、ひたすら働いて家庭に奉献しながら、生命の幸福を追求する姿は十分に有力なイメージを示す。龍瑛宗はこの作品で、理想的な女性像を完成させた上に、自らが生命の難題を克服する精神をも表示しえたと考えられる。

(3) 女性像についての検討

西川満の「稲江治春詞」と龍瑛宗の「知られざる幸福」をめぐって、両者の異同を比較することを試みる。まず共通点を見てみたい。

苦しい運命は彼女たちの身の上に遭遇しているが、運命に服従することを選ばず、さらに積極的に生きることを決める。つまり、彼女たちはずっとより良い生活の未来を望んでいて、家族のために働かなければならない理由があるので、労働に身を投ずる決意が他のことよりも堅くて強い。

そして、女性が働くということの相違する観点について、龍瑛宗は「知られざる幸福」の女主人公の口に借りて、「働くといふ習慣をつけられたのは、たいへん、よかつたと思ひます。(中略)働くことは人間の天職ではございませんでせうか。働くことは尊いことです。こよなく楽しいことです」と「労働」を讃える。現実の厳しさに対面しているにも関わらず、労働は一種の美德である価値観に根ざしていることが見取れる。それに対して、「稲江治春詞」の冒頭に、財宝がほしい抹麗に対して儚い気持ちになった「私」の最初の反応は、西川満の根底的な意識だと考えられる。異国情緒を愛した彼は、地元の祭りの鮮明な光景や音が豊かに織り込まれた表象を用いながら読者

の感覚を襲わせる。次のフェイ・阮・クリーマン氏の指摘が参考になる。

この文化的趣旨を無視するか意識的に拒絶することによって、西川は暴力的とも言える行為—文化の魅力的な部分を文脈から剥ぎ取り、日本人読者のために美味しい異国風の味付けとして提供するという—を犯している。植民地のロマンティシズムは、(表面的な美しさを)暴くと同時に(社会的重要性を)隠しているのである。⁷

「稲江治春詞」の場合、生活の圧力に縛られない男と生活の重圧に潰される女は、まるで平行線のような不平等の関係を進んでいる。植民者の目で抹麗は官能的な欲望を象徴した。一旦その単純な関係が本質から変えられると、「私」の本来の立場も微妙になってしまう。

龍瑛宗はこの作品について次のように評論を加える。「江山楼附近に住んでゐる「抹麗」といふ藝名をもつた女の生活苦の話。これは、ほのぼのとしたヒューマニズが流れてゐて、リヤリスチックな世界へ向はふとする気配を示してゐる。しかし、作品としては影の薄いものである」と説く⁸。本作の場合によれば、子供のためにこの仕事を選んだ悲しみも読者に同情を引き起こしやすいではないだろうか。その背景は詳しくないが、現実社会に接点を作ろうとする意図があると考ええる。作家は個人の文学における異国情緒に対する好尚を発揮していた一方、物語の深度を深める試みもあつただろうと推測するが、「私」と「抹麗」の両者の関係は死のために進む道を失い、植民者と被植民者との間に問題は未解決のままに終わってしまった。悲哀の余韻がひたっているのは西川満の文章の特徴であるが、これも彼が「美の獵人」⁹と言われる身分で完成した役割だと考える。

3. おわりに

敗戦後に日本に戻った西川満は、1984年に『神々の祭典』という台湾をめぐって綴った短編小説集を発行した。巻頭に彼は「わが心になお消えがたき華麗なる台湾よ!」と愛情を注いで叫んでいる。『神々の祭典』の跋において、彼は台湾その土地だけではなく、そこに住む人々に深い愛情を持ち続けていると宣言した。特に「藝姐」に関して次のように言った。

ツアボオカン

娼媒嫖と呼ばれる女性たちには、特にこころを寄せてきた。これはただフェミニストというだけではなく、学生時代に傾倒したボオドレールの『悪の華』の影響であったろう。わたしはただの一度も、これらの女性が転落してなる做嫖には接したことはないが、その雰囲気はたまらなく好きで、彼女たちの街である江山楼境界を彷徨し、その思い出をいくつか書いた。¹⁰

これは西川満本人が「藝姐」に対する告白だと見なすべきだろう。「藝姐」は彼に深い靈感を付与させる芸術形象として、ほかの台湾的な雰囲気が漂っている風物と同じように、彼なりの文学で發揮させる絶佳の素材の一つに過ぎない。龍瑛宗は西川満に対して「人生の地べたにべつたりと坐りこんで泥んこになり、胴間声をはりあげて人間哀歌を歌ふ作家ではない」¹¹と批判したが、その反面彼の特有な創作的な特色としても讃える。例えば、「西川満氏の芸術的感覚は、一寸、無類なものである。(中略) いはゞ、氏は「浪漫」的傾向を純粹に推し進めて行くべきだ。あれほど、南方的な明るい芸術的感覚は、先天的なものである。」¹²

西川満は、日本人の立場であったゆえに、台湾の伝統的な彩りのある世界が描出できたといえよう。台湾で成長していたが、とうてい日本と大きく異なる風俗習慣は彼にとって距離がある「異国」の魅力に富んでいる。新たな芸術の視角から台湾

人作家と異なるリアリズムの文学を発展する可能性が現れる。創作上のスタイルが西川満に近似しているところがあると言われる龍瑛宗は、実際に台湾の土地に生活していた台湾人であった。彼にとって、風物と風俗は生活の一部分に属する真実のものである。たとえこれらを芸術の「美」の対象として観察しても、その中に含んだ「生活性」を忘れることはできない。彼が作った女性は現実に近いものもある。その証だと考える。

ちなみに、女性が「新女性」として脱皮することを支持していた龍瑛宗は、女性をめぐる議題に投じた関心もより高かった。「知られざる幸福」のヒロインは、封建社会における女性に求められた忍従精神を持っているが、実際には自分が人生の主宰者になるという意思はある。「女性解放」であると評価される作品には至らないと思うが、フェミニストと言われる¹³龍瑛宗の自由精神と呼応することは認められるだろう。それに比べ、「フェミニスト」ではなかったと自ら承認した西川満は、女の美しい姿とその苦悩している様子を巧みに把握したが、女性の内面的な意識や個性を重んじることは不足していると思われる。

そして、時局の厳酷と対面し、創作の欲望に誠実に向かった龍瑛宗は、自分の懷疑精神や思考も捨てることなく折衷的な創作手法を作る。以下は山田敬三氏の論文を抜粋して引用する。

軍事力を背景とした支配という、個人の意志では抗することのできない現実の中で作家活動を開始した龍瑛宗にとって、その文学的信念に恥じない活動を展開することは、その最初からきわめて困難であった。だが、そんななかにあっても、客観的に許されたぎりぎりの範囲で、彼は自らの範囲で、彼は自らの文学的営為に従事し、台湾人としての民族意識をも作品の中に保持しようとした。¹⁴

「知られざる幸福」のヒロインは妻といい、母と

いい、女性の特有な忍耐力を最大限に発揮している。時代の現状に直面している以上、それは唯一の生存方式かもしれない。山田氏の指摘に即して、龍瑛宗も女の根性と同じように作家として強い意志を持ち、自分の選んだ文学の道を貫いた。

海を四面に囲まれる島国である台湾は、東アジアの中枢の位置を占めることから、長年にわたって「外来政権」という列強の強権に統制されている。日本は台湾の歴史上に重要な担い手であり、直接的に台湾に影響を与える。近代文明の下に、日本人と台湾人の文学者が時代の思潮を同時に受容しながら、台湾という創作の場所でそれぞれに独自の表現世界を発展させた。作者の意図や文化、歴史にたいする認識の微妙な差異によって、異なる文学の花を咲かせたといえよう。日本の統治側は実際に「同化」という最終的な目標を追求していたので、台湾人は当時あらゆる方面を「同化」されていたことから逃れられなかった。時代が移り、現在の我々は、もしかして「多文化共生」を一緒に迎えられるだろう。

註

- 『台湾現當代作家研究資料彙編 07：龍瑛宗』國立台灣文學館，2011，p.117-136
- 『台湾作家全集・短篇小説卷／日據時代 9』，1991 初版，p.296-301
- 『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』台南市立藝術中心，2000，p.173-185
- 『戰鼓聲中的歌者—龍瑛宗及其同時代東亞作家論文集』國立清華大學台灣文學研究所，2011，p.55-84
- 『台灣顯風錄』とは、『台灣時報』で1935年11月から1936年12月まで連載している十二回の「散文詩」があり、毎回の後で丁寧な注釈付けの実用的な「台灣風俗事典」にもある。
- 原文で「媳婦仔（シンブアー）」と書き、これは台灣語の発音であった。元々の意味は「童養媳」、女の子が小さい時に実家から売られて、養女の身分でほかの家にもらわれるが、大きくなると家の嫁になった習慣。
- フェイ・阮・クリーマン著・林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール〈植民地期台湾の日本語文学〉』慶應義塾大学出版会，2007，p.134
- 龍瑛宗「文芸評論—美の使徒西川満氏の「梨花夫人」

『龍瑛宗全集：第四冊評論集〈日本語版〉』國立台灣文學館，2008，p.79-80

- 龍瑛宗は「文芸評論：美の使徒—西川満氏の『梨花夫人』」で西川満に対する呼称である。原文は以下のように示す。「彼が文学において何を彫琢しようとしてみるのか。それは人生でもなければヒューマニズムでもない。ただ美を素めてやまない。彼ほどの飽くことなき美の獵人は現代作家のうちでさう多くみないだろう。」（『龍瑛宗全集：第四冊評論集〈日本語版〉』國立台灣文學館，2008，p.78）
- 西川満『神々の祭典』人間の星社，1984，p.392-393
- 龍瑛宗「文芸台湾」作家論『龍瑛宗全集：第四冊評論集〈日本語版〉』國立台灣文學館，2008，p.72
- 龍瑛宗「南方の作家たち」『龍瑛宗全集：第四冊評論集〈日本語版〉』國立台灣文學館，2008，p.100
- 註1書・p.131
- 山田敬三「哀しき浪漫主義者—日本統治時代の龍瑛宗」『よみがえる台湾文学—日本統治期の作家と作品』東方書店，1995，p.368

参考文献

- 陳萬益主編『龍瑛宗全集：第二冊小説集（2）〈日本語版〉』、『龍瑛宗全集：第四冊評論集〈日本語版〉』國立台灣文學館，2008
- 中島利郎・河原功編『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集第一卷』『日本統治期台湾文学 日本人作家作品集第二卷』緑陰書房，1998
- フェイ・阮・クリーマン著・林ゆう子訳『大日本帝国のクレオール〈植民地期台湾の日本語文学〉』慶應義塾大学出版会，2007
- 下村作次郎・中島利郎・藤井省三・黄英哲編『よみがえる台湾文学—日本統治期の作家と作品』東方書店，1995
- 陳藻香撰「日本領台時代の日本人作家：西川満を中心として」（東呉大學日本文化研究所博士論文），1995
- 中島利郎編『日本統治期台湾文学小事典』緑陰書房，2005
- 王惠珍編『戰鼓聲中的歌者—龍瑛宗及其同時代東亞作家論文集』國立清華大學台灣文學研究所，2011
- 朱家慧著『兩個太陽下的台灣作家—龍瑛宗與呂赫若研究』台南市立藝術中心，2000
- 陳芳明著『台灣新文學史 上』聯經出版，2011
- 陳萬益編『台灣現當代作家研究資料彙編 07：龍瑛宗』國立台灣文學館，2011
- 羅成純著「龍瑛宗研究」（日本筑波大學文學部修士論文）『台灣作家全集・短篇小説卷／日據時代 9：龍瑛宗集』前衛出版社，1992